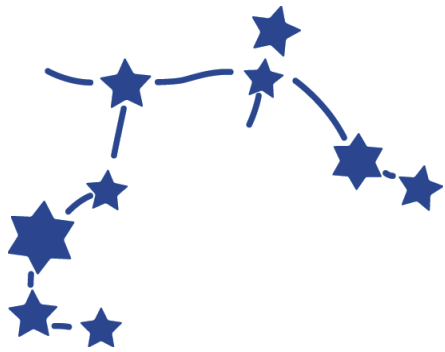




2015

大学院講義要項

外国語学研究科
中国語学専攻

京都産業大学大学院
GRADUATE SCHOOL KYOTO SANGYO UNIVERSITY

■ LC001

科 目 名	: 中国語学研究 A (通時)
担 当 者	: 矢放 昭文
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1 年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 中国語と域外諸言語の言語接触史を研究する。
授業内容・方法	: 随唐代～宋代の間に行われた中国語・域外言語の言語接触史に関わる代表的な資料の目録を作成しつつ、従来の研究の得失を分析し、今後の研究の展望を見据えるとともに、各資料の言語史上の特質を求める。
授 業 計 画	第 1 回 唐代の域外対音資料と研究史概説 1 第 2 回 唐代の域外対音資料と研究史概説 2 第 3 回 唐代の域外対音資料と研究史概説 3 第 4 回 『梵語千字文』(梵漢対音)の特徴と問題点 1 第 5 回 『梵語千字文』(梵漢対音)の特徴と問題点 2 第 6 回 『開蒙要訓』の特徴と問題点の検討 1 第 7 回 『開蒙要訓』の特徴と問題点の検討 2 第 8 回 『藏文千字文』(藏漢対音)の特徴と問題点の検討 1 第 9 回 『藏文千字文』(藏漢対音)の特徴と問題点の検討 2 第 10 回 『藏文千字文』(藏漢対音)の特徴と問題点の検討 3 第 11 回 『唐蕃会盟碑』等(藏漢対音)の特徴と問題点の検討 1 第 12 回 『唐蕃会盟碑』等(藏漢対音)の特徴と問題点の検討 2 第 13 回 中古漢語による唐代域外対音資料分析研究 1 第 14 回 中古漢語による唐代域外対音資料分析研究 2 第 15 回 中古漢語による唐代域外対音資料分析研究 3
評価方法・基準	: 授業時の発表 20%、発表 20%、レポート 60%
教 材 な ど	教科書: 楊劍橋主編『漢語音韻学講義』(復旦大学出版社、2005 年刊) 参考書等: 黄輝堃編著『音韻學引論』(香港商務印書館、1994 年刊) 指定図書: 『広韻切韻譜』
備 考	: 参照すべき資料は多岐にわたる。そのため参考文献目録の作成が望まれる。

■ LC002

科 目 名	: 中国語学研究B (共時)
担 当 者	: 中川 千枝子
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 中国語における歴代口語文の変遷と発展について、形態論および統語論の分野から考察することを目的とする。
授業内容・方法	: 口語資料の読解を通して、中国語の口語文の時空間の広がりと言彙文法の変化について知識を深める。さらにその背後にある漢語の言語接触の歴史とその痕跡について調査と分析をおこなう。言語資料とその関連文献については、可能な限りデータベースを活用し、計量的手法でアプローチしていきたい。
授 業 計 画	: 現代から近世の口語資料の読解を通して語彙文法の変化を調査する。 第1回 漢語史 第2回 漢語史 第3回 文章のスタイル 第4回 文章のスタイル 第5回 中国の口語文の特殊性 第6回 中国の口語文の特殊性 第7回 共通語と方言 第8回 共通語と方言 第9回 語彙の分析 第10回 語彙の分析 第11回 語彙の分析 第12回 文法の分析 第13回 文法の分析 第14回 文法の分析 第15回 口頭発表：研究テーマとその動機・関連文献・研究方法の提示
評価方法・基準	: 毎回の授業への参加態度(70%)、調査分析した内容の口頭発表とその報告書(30%)により評価する。
教 材 な ど	: 参加者と相談の上で、口語史研究に重要なコーパスを決めたい。
備 考	:

■ LC003

科 目 名	: 中国語学研究C（総合）
担 当 者	: 森 博達
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1 年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 日中音韻交渉史を学び、研究の基礎的能力を育成する。
授業内容・方法	: 毎回のテーマに沿って資料を配付し、日中音韻交渉史を講義する。
授 業 計 画	第 1 回 導入 第 2 回 現代北京語の音韻体系 第 3 回 日本漢字音と音訳漢字 第 4 回 擬音語と音韻史 第 5 回 五十音図と中国音韻学 第 6 回 『日本書紀』α群原音依拠説 第 7 回 『日本書紀』と唐代北方音 第 8 回 イロハの音訳（『書史会要』） 第 9 回 イロハの音訳（『日本一鑑』） 第 10 回 近世唐音と『東音譜』 第 11 回 「魏志倭人伝」の音訳漢字 第 12 回 上古音から中古音への変遷 第 13 回 埼玉稻荷山鉄剣銘と古韓音 第 14 回 銅鏡の銘文と音韻学 第 15 回 まとめ
評価方法・基準	: 平常点（授業の参加度と理解度）と期末レポート
教 材 な ど	: 森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館（1991 年）等
備 考	:

■ LC005

科 目 名	: 中国文化研究 A
担 当 者	: 小林 武
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1 年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 章炳麟 (1869～1936、号 太炎) の書いた「中国文字略説」 (『章太炎の白話文』所収) を読み、「漢字」についての考え方を学ぶ。 章炳麟は、辛亥革命の思想家であって清朝考証学の大家でもある。その学問的業績は広範囲に及んでいるが、明治末期に日本にきた中国人留学生のために中国文化などについて平易に講義をした。それが『章太炎の白話文』である。その一節の「中国文字略説」は、漢字をめぐる中国の伝統的な研究について教えたものである。
授業内容・方法	: 講読をしながら講義する。また適宜レポートを課して理解整理する。
授 業 計 画	: 第 1 回 漢字の構造と機能について概説する。 第 2 回 章炳麟「七 中国文字略説」を読みながら、漢字について学ぶ。 第 3 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 4 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 5 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 6 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 7 回 レポートの講評、および「七 中国文字略説」の講読 第 8 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 9 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 10 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 11 回 レポートの講評、および「七 中国文字略説」の講読 第 12 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 13 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 14 回 引き続き「七 中国文字略説」を読む。 第 15 回 レポートの講評
評価方法・基準	: 授業による事前学習 (70%)、レポート (30%)
教 材 な ど	: プリント配付
備 考	:

■ LC006

科 目 名	: 中国文化研究B
担 当 者	: 畠山 香織
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 中国文化関連の文献を講読し、関連する問題について講義を行う。歴史、思想、宗教観、社会、文化などに関する知識を学び、より高いレベルの中国文化読解力を身に付ける。さらに、日本文化との比較も念頭に、物事を広い視野で観察し、多面的に分析し思考する力を培う。
授業内容・方法	: 中国文化関連の文献（林語堂『 <i>My Country and My People</i> 』日本語訳題：中国＝文化と思想）を講読し、内容について問題点を摘出し、講義を行う。出席者には毎回、部分的な音読と翻訳の予習を課す。講義後は理解を深めるため要点をまとめさせる。
授 業 計 画	: - 第1回 授業の進め方の説明、テキストの配付 - 第2回 林語堂『中国＝文化と思想』 序文 - 第3回 同上テキスト 第1部 第1章 中国人 1 - 第4回 同上テキスト 第1部 第1章 中国人 2 - 第5回 同上テキスト 第1部 第1章 中国人 3 - 第6回 同上テキスト 第1部 第1章 中国人 4 - 第7回 同上テキスト 第1部 第1章 中国人 5 - 第8回 同上テキスト 第1部 第2章 中国人の性格 1・2 - 第9回 同上テキスト 第1部 第2章 中国人の性格 3・4 - 第10回 同上テキスト 第1部 第2章 中国人の性格 5・6 - 第11回 同上テキスト 第1部 第2章 中国人の性格 7・8 - 第12回 同上テキスト 第1部 第3章 中国人の精神 1・2 - 第13回 同上テキスト 第1部 第3章 中国人の精神 3・4 - 第14回 同上テキスト 第1部 第3章 中国人の精神 5 - 第15回 同上テキスト 第1部 第3章 中国人の精神 6
評価方法・基準	: 授業の参加態度・予習などの準備（60%）、発言発表等（20%）、レポート（20%）により評価する。
教 材 な ど	: プリントを配付する。
備 考	:

■ LC007

科 目 名	: 中国語学セミナー A (通時)
担 当 者	: 矢放 昭文
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1 年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 近代 (18 世紀～20 世紀初頭) 中国語の成立過程で英語などの西洋語が中国語に与えた影響と、その受容に伴い変貌を遂げた中国語の諸相について研究を行う。
授業内容・方法	: 該当分野の中でも特に重要と見なされる南北中国の諸方言と英語・ポルトガル語の言語接触史についての研究資料と方法について詳細に検討する。
授 業 計 画	英語・葡 (ポルトガル) 語と中国語の言語接触をものがたる諸資料、例えば『亜片戦争資料』に収録される音訳語彙、『海国図志』『瀛環志略』『澳門記略』所収の英漢・葡漢対音語彙などについて、その成立過程、資料の性質、反映する中国語方言の特色について従来の研究論文を丁寧に読破し、言語文化接触研究の現状を知ると同時に研究方法を検討する。 第 1 回 印光任・張汝霖編著『澳門記略』の音訳語とその特質 1 第 2 回 印光任・張汝霖編著『澳門記略』の音訳語とその特質 2 第 3 回 印光任・張汝霖編著『澳門記略』の音訳語とその特質 3 第 4 回 魏源『海国図志』の音訳語とその特質 1 第 5 回 魏源『海国図志』の音訳語とその特質 2 第 6 回 魏源『海国図志』の音訳語とその特質 3 第 7 回 徐繼畲『瀛環志略』の音訳語とその特質 1 第 8 回 徐繼畲『瀛環志略』の音訳語とその特質 2 第 9 回 徐繼畲『瀛環志略』の音訳語とその特質 3 第 10 回 『亜片戦争資料』の音訳語とその特質 1 第 11 回 『亜片戦争資料』の音訳語とその特質 2 第 12 回 『亜片戦争資料』の音訳語とその特質 3 第 13 回 18 世紀後半～19 世紀中期「英華音訳資料」特質の研究 1 第 14 回 18 世紀後半～19 世紀中期「英華音訳資料」特質の研究 2 第 15 回 18 世紀後半～19 世紀中期「英華音訳資料」特質の研究 3
評価方法・基準	: 授業時の発表 20%、発表 20%、レポート 60%
教 材 な ど	資料: プリント使用 教科書: 楊劍橋主編『漢語音韻学講義』 (復旦大学出版社、2005 年刊) 参考書等: 黄輝堃編著『音韻学引論』 (香港商務印書館、1994 年刊) 指定図書: 『広韻切韻譜』
備 考	: 参照すべき資料は多岐にわたる。そのため参考文献目録の作成が望まれる。

■ LC008

科 目 名	: 中国語学セミナーB (共時)
担 当 者	: 中川 千枝子
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 中国語における歴代口語文の変遷と発展について、形態論および統語論の分野から考察することを目的とする。
授業内容・方法	: 口語資料の読解を通して、中国語の口語文の時空間の広がりと言彙文法の変化について知識を深める。さらにその背後にある漢語の言語接触の歴史とその痕跡について調査と分析をおこなう。言語資料とその関連文献については、可能な限りデータベースを活用し、計量的手法でアプローチしていきたい。
授 業 計 画	: 近世から中世の口語資料の読解を通して言彙文法の変化を調査する。 第1回 口語文学作品 第2回 口語文学作品 第3回 口語文学作品 第4回 口語文学作品 第5回 歴代の会話教科書 第6回 歴代の会話教科書 第7回 歴代の会話教科書 第8回 歴代の会話教科書 第9回 古典の口語訳 第10回 古典の口語訳 第11回 古典の口語訳 第12回 古典の口語訳 第13回 語録、または変文 第14回 語録、または変文 第15回 口頭発表：研究計画・テーマ関連文献の要約・調査分析の報告
評価方法・基準	: 毎回の授業への参加態度(70%)、調査分析した内容の口頭発表とその報告書(30%)により評価する。
教 材 な ど	: 参加者と相談の上で、口語史研究に重要なコーパスを決めたい。
備 考	:

■ LC009

科 目 名	： 中国語学セミナーC（総合）
担 当 者	： 森 博達
週 時 間 数	： 2
単 位 数	： 2
配 当 年 次	： 1 年
開 講 期 間	： 秋学期
授 業 目 標	： 日中音韻交渉史に関して履修者が発表を行い、研究の基礎的能力を育成する。
授業内容・方法	： 日中音韻交渉史に関してテーマを選び、演習形式で授業を行う。
授 業 計 画	： 第1回 導入
	第2回 現代北京語の音韻①
	第3回 現代北京語の音韻②
	第4回 現代北京語の音韻③
	第5回 日本漢字音①
	第6回 日本漢字音②
	第7回 日本漢字音③
	第8回 日本漢字音④
	第9回 万葉仮名①
	第10回 万葉仮名②
	第11回 万葉仮名③
	第12回 漢字音訳資料①
	第13回 漢字音訳資料②
	第14回 漢字音訳資料③
	第15回 まとめ
評価方法・基準	： 発表の内容と授業への参加度による。
教 材 な ど	： 随時指示する。
備 考	：

■ LC011

科 目 名	: 中国文化セミナーA
担 当 者	: 小林 武
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	『漢書』芸文志 六芸略の小学関係の箇所を読む。古代における文字研究の始まりを知ること、中国語研究のあり方や性格を学ぶ。 『漢書』は、後漢、班固(32-92)が書いた歴史書で、漢王朝を記録した「正史」である。芸文志は、その時代に現存した図書の目録で、『漢書』芸文志が最も古い。「小学」とは、伝統中国において為されてきた文字研究のことで、中国の学問の基礎になってきた。 『漢書』芸文志は、六芸略・諸子略・詩賦略・兵書略・数述略・方技略からなるが、六芸略に文字関係の箇所がある。これを読むことを通して、古代においていかに文字が考えられたかを知る。
授業内容・方法	: 講読を通して講義する。また適宜レポート課して、理解を整理する。
授 業 計 画	第1回 『漢書』芸文志と中国の図書分類、文字学などについて概説する。 第2回 引き続き『漢書』芸文志と中国の図書分類、文字学などについて概説する。 第3回 『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第4回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第5回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第6回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第7回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第8回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第9回 これまでの整理とレポート 第10回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第11回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第12回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第13回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第14回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。 第15回 引き続き『漢書』芸文志 六芸略の「小学」関係箇所を読む。
評価方法・基準	: 平常の準備が肝要である（70%）。レポートもしてもらう（30%）。
教 材 な ど	: テキストは講義初回に配付
備 考	:

■ LC012

科 目 名	: 中国文化セミナーB
担 当 者	: 畠山 香織
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 中国文化関連の文献を講読し、出席者が音読、翻訳、要点まとめなどを実習し、中国の歴史、思想、宗教観、社会、文化などに関する知識を学習する。自ら問題を発見し、資料調査を行い、思考した内容をまとめて発表する訓練をする。その作業を通じてより深みのある中国文理解力を得ることを目標とする。
授業内容・方法	: 『中国文化研究B』で扱った中国文化関連の文献を継続学習するが、初めての出席でも妨げはない。毎回、予習として定められた部分を音読し、文中の歴史的人物、事項などについて下調べをし、翻訳をする。要点・要旨まとめを課する回もある。出席者主体で進行する。問題点について調査、検討を重ねたものを期末レポート作成につなげる。
授 業 計 画	第1回 授業の進め方の説明 テキストの配付 第2回 林語堂『中国＝文化と思想』 第1部 第4章 人生の理想 1 第3回 同上テキスト 第1部 第4章 人生の理想 2 第4回 同上テキスト 第1部 第4章 人生の理想 3 第5回 同上テキスト 第1部 第4章 人生の理想 4 第6回 同上テキスト 第1部 第4章 人生の理想 5 第7回 同上テキスト 第2部 第6章 社会生活と政治生活 1 第8回 同上テキスト 第2部 第6章 社会生活と政治生活 2 第9回 同上テキスト 第2部 第6章 社会生活と政治生活 3 第10回 同上テキスト 第2部 第6章 社会生活と政治生活 4 第11回 同上テキスト 第2部 第6章 社会生活と政治生活 5 第12回 同上テキスト 第2部 第7章 文学生活 1 第13回 同上テキスト 第2部 第7章 文学生活 2 第14回 同上テキスト 第2部 第7章 文学生活 3 第15回 同上テキスト 第2部 第7章 文学生活 4
評価方法・基準	: 授業の参加態度・予習などの準備（50%）、発表とレポート（50%）により評価する。
教 材 な ど	: プリントを配付する。
備 考	:

■ LC013

科 目 名	: 中国語学発展セミナーA (通時)
担 当 者	: 矢放 昭文
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 近代(18世紀末～20世紀初頭)中国語の成立過程で英語主体とする西洋語が中国語に与えた影響と、その受容に伴い変貌を遂げたと推定される中国語の諸相について知ることを目標とする。
授業内容・方法	: 中国語史資料の一つとして漢訳聖書類を扱い、読解を進める一方で、その語学的特質と語史上の価値・研究方法について従来の研究論文を通読し、問題の把握に勤める。
授 業 計 画	西洋と中国の言語文化接触史資料の一つとして漢訳聖書類をとりあげ、その成立過程、資料の性質、予測される研究成果について成立年代順に正確な検討作業を行う。18世紀後半～20世紀初頭にかけて中国各地で活躍したヨーロッパ宣教師達が作成した漢訳聖書類は北方官話、広東語、客家語、福州語、上海語などの口語にもとづいていると言われており、漢語史資料として貴重な価値をもっている。本演習ではこれらの文献を素材として研究の現状を知ると同時に研究方法を検討する。 第1回 北京語版『聖書』資料の検討 第2回 北京語版『聖書』研究方法の検討 第3回 広東語版『聖書』資料の検討 第4回 広東語版『聖書』研究方法の検討 第5回 広東語版『天路歷程』資料の検討 第6回 広東語版『天路歷程』研究方法の検討 第7回 客家語版『聖書』資料の検討 第8回 客家語版『聖書』研究方法の検討 第9回 福州語版『聖書』資料の検討 第10回 福州語版『聖書』研究方法の検討 第11回 台湾語版『聖書』資料の検討 第12回 台湾語版『聖書』研究方法の検討 第13回 上海語版『聖書』資料の検討 第14回 上海語版『聖書』研究方法の検討 第15回 『聖書』(各方言版)資料と研究方法
評価方法・基準	: 授業時の発表 20%、発表 20%、レポート 60%
教 材 な ど	資料: プリント使用 教科書: 楊劍橋主編『漢語音韻学講義』(復旦大学出版社、2005年刊) 参考書等: 黄輝堃編著『音韻學引論』(香港商務印書館、1994年刊) 指定図書: 項夢冰・曹暉編著『漢語方言地理学』(中国文史出版社、2005年) 辻本春彦著・森博達編『広韻切韻譜』(臨川書店、2008年)
備 考	: 参照すべき資料は多岐にわたる。そのため参考文献目録の作成が望まれる。

■ LC014

科 目 名	: 中国語学発展セミナーB (共時)
担 当 者	: 中川 千枝子
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 朝鮮半島で李朝以来、漢語教科書として使われた《老乞大》および《朴通事》を資料として用い、元代から明代にかけて、中国北方で話されていた中国語の語彙と文法を研究する。あわせて、同じ資料から、その当時の人々のくらしや、朝鮮半島と大都との間で行なわれていた交易など、この地域で展開していた文化や物・人の交流の実態を分析する。
授業内容・方法	: 《老乞大》を「圭章閣叢書第九」におさめられた版本をテキストに選び講読し、この中で“漢兒言語”と呼ばれている当時の中国語の特徴を知る。同時に、旧本《老乞大》と校勘することによって、2つの版本の異同を分析する。
授 業 計 画	第1回 授業の進め方の説明、テキスト配付 第2回 版本に関する解説、および資料講読と校勘作業 第3回 版本に関する解説、および資料講読と校勘作業 第4回 版本に関する解説、および資料講読と校勘作業 第5回 版本に関する解説、および資料講読と校勘作業 第6回 工具書に関する概説、および資料講読と校勘作業 第7回 工具書に関する概説、および資料講読と校勘作業 第8回 工具書に関する概説、および資料講読と校勘作業 第9回 工具書に関する概説、および資料講読と校勘作業 第10回 参考文献に関する解説、および資料講読と校勘作業 第11回 参考文献に関する解説、および資料講読と校勘作業 第12回 参考文献に関する解説、および資料講読と校勘作業 第13回 春学期レポート作成に関する指導、および執筆要領 第14回 春学期レポート作成に関する指導、および執筆要領 第15回 春学期レポート作成に関する指導、および執筆要領
評価方法・基準	: 毎回の授業での参加態度(70%)、調査分析した内容の口頭発表とその報告書(30%)により評価する。
教 材 な ど	: プリント配付
備 考	:

■ LC015

科 目 名	中国語学発展セミナーC（総合）
担 当 者	森 博達
週 時 間 数	2
単 位 数	2
配 当 年 次	2年
開 講 期 間	春学期
授 業 目 標	『日本書紀』を材料として、正格漢文と和化漢文の諸相を学ぶ。
授業内容・方法	『日本書紀』各巻の文章について、履修者が倭習を摘出する。演習形式で授業を行う。
授 業 計 画	第1回 導入 第2回 講義「正格漢文と和化漢文」 第3回 講義「『日本書紀』の倭習と摘出の方法」 第4回 巻1「神代紀・上」① 第5回 巻1「神代紀・上」② 第6回 巻2「神代紀・下」① 第7回 巻2「神代紀・下」② 第8回 巻3「神武紀」 第9回 巻5「崇神紀」 第10回 巻6「垂仁紀」 第11回 巻7「景行・成務紀」 第12回 巻8「仲哀紀」 第13回 巻9「神功紀」 第14回 巻10「応神紀」 第15回 まとめ
評価方法・基準	発表の内容と授業への参加度
教 材 な ど	新編日本古典文学全集『日本書紀』上（小学館）等
備 考	

■ LC017

科 目 名	: 中国文化発展セミナーA
担 当 者	: 小林 武
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 「中国文化セミナーA」を承けて、引き続き、梁の皇侃が著した『論語義疏』を読んでいく。精読することによって、中国思想における解釈の意味と基礎概念を学ぶ。
授業内容・方法	: 講読を通して講義する。またレポートをすることで理解を深める。
授 業 計 画	第1回 『論語義疏』を再び読むにあたって、その他の主な『論語』注釈と比較対照する（その1） 第2回 『論語義疏』とその他の主な『論語』注釈との比較対照（その2） 第3回 『論語義疏』とその他の主な『論語』注釈との比較対照（その3） 第4回 『論語義疏』とその他の主な『論語』注釈との比較対照（その4） 第5回 『論語義疏』先進篇を読む。 第6回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第7回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第8回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第9回 レポートの講評、および引き続き『論語義疏』先進篇の講読 第10回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第11回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第12回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第13回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第14回 引き続き『論語義疏』先進篇を読む。 第15回 レポートの講評、および引き続き『論語義疏』先進篇の講読
評価方法・基準	: 授業による事前学習(70%)、レポート(30%)
教 材 な ど	: プリント配付
備 考	:

■ LC018

科 目 名	： 中国文化発展セミナーB
担 当 者	： 畠山 香織
週 時 間 数	： 2
単 位 数	： 2
配 当 年 次	： 2年
開 講 期 間	： 春学期
授 業 目 標	： 19 世紀末から 20 世紀にかけて中国の文化人が著した日本文化研究の文献を講読し、関連する問題について討議を行い、最終的には各自のテーマを定め、発表する。期末にはレポートを提出する。中国人の手による日本文化研究の過去と現在を知り、日本の何をどのように論評しているかを読み取り、その視点に中国的要素が如何に表出されているかを検討し、今日につながる日本認識の由来を理解する。
授業内容・方法	： 中文と和文の文献を教材にまず音読と翻訳を行い、内容について問題点を見定め、不明な点を調査し、出席者同士で討論し、理解を深める。出席者は各自テーマを選び、発表資料を作成し、口頭発表をする。期末にはレポートを提出する。
授 業 計 画	： 第 1 回 授業の進め方の説明、テキスト配付 第 2 回 戴季陶『日本論』 6 日本人と日本文明 第 3 回 戴季陶『日本論』 7 武士の生活と武士道 第 4 回 戴季陶『日本論』 22 信仰の真実性 第 5 回 戴季陶『日本論』 23 美を愛する国民 第 6 回 口頭発表にそなえ、レジュメ作成の説明。関心あるテーマを提起し、検討する。 第 7 回 周作人『日本談義集』 日本の人情美 第 8 回 周作人『日本談義集』 日本と中国 第 9 回 周作人『日本談義集』 日本管窺の二 第 10 回 発表についての準備状況の報告と確認 第 11 回 郁達夫『日本の文化的生活』 第 12 回 1990 年代以降の日本文化研究文献を講読 第 13 回 関心あるテーマの発表レジュメ作成の報告と確認 第 14 回 テーマについて発表・討論 第 15 回 テーマについて発表・討論 2 回目
評価方法・基準	： 毎回の授業での参加態度（40%）、口頭発表とレポート（60%）により評価する。
教 材 な ど	： プリントを配付する。
備 考	：

■ LC019

科 目 名	: 中国語学特講 A (通時)
担 当 者	: 矢放 昭文
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2 年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 中国語と域外諸言語の言語接触史を研究する。
授業内容・方法	: 元・明代から清代の間に存在した中国語・域外言語の言語接触史に関わる代表的な資料の目録を作成しつつ、従来の研究の得失を分析し、今後の研究の展望を見据えるとともに、各資料の言語史上の特質を求める。
授 業 計 画	元代の代表的な対音資料である『蒙古字韻』、『事林広記』所収の八思巴文『百家姓』、明代の『西字奇蹟』・『西儒耳目資』、清代の『同文韻統』について内外のこれまでの研究成果を検討しつつ、資料の整理と分析を進める。またこれら資料と同時期に通行した韻書・韻図の整理と分析を行い、その結果を踏まえて言語接触史の諸相を探求する。 第 1 回 『蒙古字韻』資料の検討 第 2 回 『蒙古字韻』研究方法の検討 第 3 回 『事林広記』所収八思巴文『百家姓』資料の検討 第 4 回 『事林広記』所収八思巴文『百家姓』研究方法の検討 第 5 回 『西字奇蹟』資料の検討 第 6 回 『西字奇蹟』研究方法の検討 第 7 回 『西儒耳目資』資料の検討 1 第 8 回 『西儒耳目資』資料の検討 2 第 9 回 『西儒耳目資』研究方法の検討 第 10 回 『同文韻統』資料の検討 第 11 回 『同文韻統』研究方法の検討 第 12 回 英粵対音資料の検討 第 13 回 栄悦研究方法の検討 第 14 回 元～清代対音資料所収官話音の研究 1 第 15 回 元～清代対音資料所収官話音の研究 2
評価方法・基準	: 平常点より評価する。授業時の発表 20%、発表 20%、レポート 60%
教 材 な ど	資料：プリント 教科書：黄輝堃編著『音韻學引論』（香港商務印書館、1994 年刊） 参考書等：項夢冰・曹暉編著『漢語方言地理学』（中国文史出版社、2005 年） 『漢語方言地図集』 辻本春彦著・森博達編『広韻切韻譜』（臨川書店、2008 年）
備 考	: 参照すべき資料は多岐にわたる。そのため参考文献目録の作成が望まれる。

■ LC020

科 目 名	: 中国語学特講 B (共時)
担 当 者	: 中川 千枝子
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2 年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 朝鮮半島で李朝以来、漢語教科書として使われた《老乞大》および《朴通事》を資料として用い、元代から明代にかけて、中国北方で話されていた中国語の語彙と文法を研究する。あわせて、同じ資料から、その当時の人々のくらしや、朝鮮半島と大都との間で行なわれていた交易など、この地域で展開していた文化や物・人の交流の実態を分析する。
授業内容・方法	: 《朴通事》を、やはり「圭章閣叢書第九」におさめられた版本により講読する。この中から、現代北京語にも残っている表現と、“漢兇言語”に固有の言い回しを拾い出し、その背景を考察する。
授 業 計 画	: 第 1 回 授業の進め方の説明、テキスト配付 第 2 回 版本に関する解説、および資料講読と翻字作業 第 3 回 版本に関する解説、および資料講読と翻字作業 第 4 回 版本に関する解説、および資料講読と翻字作業 第 5 回 版本に関する解説、および資料講読と翻字作業 第 6 回 語彙に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 7 回 語彙に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 8 回 語彙に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 9 回 語彙に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 10 回 文法に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 11 回 文法に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 12 回 文法に関する概説、および資料講読と翻字作業 第 13 回 秋学期レポート作成に関する指導、および執筆要領 第 14 回 秋学期レポート作成に関する指導、および執筆要領 第 15 回 秋学期レポート作成に関する指導、および執筆要領
評価方法・基準	: 毎回の授業での参加態度(70%)、調査分析した内容の口頭発表とその報告書(30%)により評価する。
教 材 な ど	: プリント配付
備 考	:

■ LC021

科 目 名	: 中国語学特講C (総合)
担 当 者	: 森 博達
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 『日本書紀』を資料として、文献批判の方法と実際について理解を深める。
授業内容・方法	: 『日本書紀』の表記と文章を分析し、各巻の成立過程について講義する。
授 業 計 画	第1回 導入 第2回 『日本書紀』の研究方法与今後の課題 第3回 『日本書紀』研究論：五井蘭州『刪正日本書紀』 第4回 『日本書紀』音韻論：アクセント優先仮名 第5回 『日本書紀』文章論：文章より見た書紀区分論 第6回 『日本書紀』編修論：巻21「用命・崇峻紀」の成立過程 第7回 文章論の研究動向と展望① 第8回 文章論の研究動向と展望② 第9回 書紀と韓国古代漢字文化① 第10回 書紀と韓国古代漢字文化② 第11回 天文研究と書紀区分論 第12回 体例と出典論 第13回 「孝徳紀」「皇極紀」への加筆 第14回 編纂の主導者は誰か 第15回 まとめ
評価方法・基準	: 平常点（授業の理解と参加度）と期末レポートによる。
教 材 な ど	森博達『日本書紀の謎を解く―述作者は誰か―』中公新書、1991年 森博達『日本書紀 成立の謎―編纂の主導者は誰か―』中央公論新社、1999年
備 考	:

■ LC023

科 目 名	： 中国文化特講 A
担 当 者	： 小林 武
週 時 間 数	： 2
単 位 数	： 2
配 当 年 次	： 2 年
開 講 期 間	： 秋学期
授 業 目 標	： 儒教にとって歴史をいかに考えるかは、大きな課題であった。また清末は、儒教の歴史認識が動揺した時代でもあった。新しい西洋の歴史学が紹介されたからである。儒教がどのように歴史を考えてきたのか。清末において何が問題となったのか。中国の歴史思想と揺れ動く歴史認識について考える。 テキストは、随時必要なものを参照するが、主として梁啓超（1873～1929）の書いた「新史学」（1902）を用いる。梁啓超は中国近代の改革主義者で、その明快な文章は大きな影響力を発揮し、「新史学」は中国近代において問題になった点を明確にしているからである。
授業内容・方法	： 講読を通して講義する。また、適宜レポートを課す。
授 業 計 画	： 第 1 回 中国の歴史思想の展開について概説する。 第 2 回 中国の歴史認識の性格について概説する。 第 3 回 「六経は皆歴史である」という考え方（1） 第 4 回 「六経は皆歴史である」という考え方（2） 第 5 回 「六経は皆歴史である」という考え方（3） 第 6 回 「六経は皆歴史である」という考え方（4） 第 7 回 まとめのレポートとその講評 第 8 回 梁啓超「新史学」を読む（「中国之旧史」）。 第 9 回 引き続き「新史学」を読む（ 〃 ）。 第 10 回 引き続き「新史学」を読む（ 〃 ）。 第 11 回 引き続き「新史学」を読む（ 〃 ）。 第 12 回 引き続き「新史学」を読む（「論正統」）。 第 13 回 引き続き「新史学」を読む（ 〃 ）。 第 14 回 引き続き「新史学」を読む（ 〃 ）。 第 15 回 まとめのレポートとその講評
評価方法・基準	： 授業による事前学習 (70%)、レポート (30%)
教 材 な ど	： プリント配付
備 考	：

■ LC024

科 目 名	: 中国文化特講 B
担 当 者	: 畠山 香織
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 2年
開 講 期 間	: 秋学期
授 業 目 標	: 中国文化や思想についての文献を講読し、関連する問題について講義を行う。中国語による研究書、論文を選び、読解や翻訳、問題提起や討論を経て、より高いレベルの思考力と分析力を培い、多面的に中国文化や思想をとらえ、関心のある課題を見いだせるようにしたい。
授業内容・方法	: 『中国民族性 1 百家論説中国人』（沙蓮香編 三聯書店）をテキストにする。1980年代後半に出版され、1990年代には改訂、再版されている。元になっているのは「中国民族性格與中国社会改革」をテーマにした研究プロジェクトの成果をまとめた書物だ。中国や海外の研究者が中国文化思想や中国人などについて著した言説をテーマごとに選択、収集してある。その内容を講読し、説明を加える。ポイントになる個所について褒貶を含む意見を出し合い、理解を深化させる。
授 業 計 画	: 第1回 授業の進め方の説明・テキストの配付 第2回 『中国民族性 1 百家論説中国人』 序文 第3回 同上テキスト 「代序：關於中國傳統文化的幾個問題」 第4回 同上テキスト PP. 1～6 「中國和中國人」 その他 第5回 同上テキスト PP. 7～9 「中國人及其叛亂」 その他 第6回 同上テキスト PP. 11～14 「東方宗教」 第7回 同上テキスト PP. 15～19 「獨立種族」 その他 第8回 同上テキスト PP. 20～23 「中國問題之解決」 1 第9回 同上テキスト PP. 24～26 「中國問題之解決」 2 第10回 同上テキスト PP. 27～30 「中國問題之解決」 3 第11回 同上テキスト PP. 31～35 「中國問題之解決」 4 第12回 同上テキスト PP. 36～38 「中國人的氣質」 1 第13回 同上テキスト PP. 39～42 「中國人的氣質」 2 第14回 同上テキスト PP. 43～46 「中國人的氣質」 3 第15回 同上テキスト PP. 47～50 「中國人的氣質」 4
評価方法・基準	: 授業の参加態度・予習などの準備（60%）、発言発表等（20%）、レポート（20%）により評価する。
教 材 な ど	: プリントを配付する。
備 考	:

■ LC029

科 目 名	: 中国語通訳・翻訳研究A
担 当 者	: 関 光世
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 2
配 当 年 次	: 1年
開 講 期 間	: 春学期
授 業 目 標	: 本科目では、関連する文献の講読と問題点の討論をととして、通訳の理論的メカニズムに関する基本的な理解を再確認することからスタートする。さらに履修者が選択したテーマに関する先行研究の講読と討論をととして、研究のための基礎を作ることを目的とする。主に通訳を取り上げるが、必要があれば翻訳論にも言及する。
授業内容・方法	: 中国語通訳の第一人者による実用書を基礎に通訳に対する基本的な理解を深める。各自が「日中通訳史」、「通訳訓練法」、「種類別通訳の特性」などさらに踏み込んだテーマを選択した後は、それぞれのテーマに関する必読文献や最新の先行研究の講読と討論を進めながら、各自が発表の準備を行い、定期的に内容を全員で検討する機会を持ちつつ最終発表に向けて準備を行う。
授 業 計 画	: 第1回 ガイダンス、資料配付 第2回 『中国語通訳への道』から読み取る通訳・通訳者 本書の講読を前提にした講義と討論。テーマは「通訳の本質とは」「通訳の種類とプロセス」 第3回 『中国語通訳への道』から読み取る通訳・通訳者 本書の講読を前提にした講義と討論、テーマは「通訳に必要な資質」 第4回 『中国語通訳への道』から読み取る通訳・通訳者 本書の講読を前提にした講義と討論、テーマは「有効な訓練法」 第5回 日中における通訳・翻訳の歴史 第6回 「会議通訳の現状とその技法」に関する先行研究論文を講読 第7回 「司法通訳の現状とその技法」に関する先行研究論文を講読 第8回 「放送通訳の現状とその技法」に関する先行研究論文を講読 第9回 「同時通訳のメカニズム」に関する先行研究論文を講読 第10回 学生による中間報告及び報告内容の検討、討論 第11回 「逐次通訳のメカニズム」に関する先行研究論文を講読 第12回 「通訳訓練」に関する先行研究論文を講読 第13回 「背景知識とその動員」に関する先行研究論文を講読 第14回 発表の準備、内容の検討 第15回 発表会
評価方法・基準	: 授業への参加の積極性 40%、発表 60%を目安として総合的に判断し評価する。
教 材 な ど	: 参考書等:『通訳翻訳研究』日本通訳翻訳学会 (2000～) 『新版 中国語通訳への道』塚本慶一 (大修館書店 2013)
備 考	: 特になし

■ LC030

科 目 名	中国語通訳・翻訳研究B
担 当 者	関 光世
週 時 間 数	2
単 位 数	2
配 当 年 次	1 年
開 講 期 間	秋学期
授 業 目 標	中国語通訳・翻訳研究Aでの理解を基礎に、各自テーマに関する理解を深めるが、授業では特に「通訳訓練の検討と開発」をとりあげ、関連する文献を講読しながら、実践をととして効果的な訓練方法を模索する。また翻訳については日本語の文学作品の中国語翻訳、映画の字幕翻訳について、翻訳のメカニズム、問題点を理解する。
授業内容・方法	通訳については「通訳訓練の検討と開発」をテーマに、関連する文献を講読しながら、各自訓練教材を作成し、全員で実践しながら効果的な方法を模索する。 翻訳については日本語の文学作品の中国語翻訳、映画の字幕翻訳について、実際の対訳を比較しながら、問題点を討論する。 学期末にはそれぞれの関心を持ったテーマについてレポートを提出する。
授 業 計 画	第1回 ガイダンス、資料配付 第2回 講義「通訳訓練の種類とその方法、効果」 第3回 講義と実践「シャドウイング練習」 第4回 学生による教材の提案と検討「シャドウイング練習」 第5回 「リプロダクション練習」の実践と検討 第6回 学生による教材の提案と検討「リプロダクション練習」 第7回 講義と実践「背景知識の動員」 第8回 学生による教材の提案と検討「背景知識の動員」 第9回 講義「中国語翻訳作品に見られる英語の影響—欧化語法について」 第10回 日本語小説の中国語翻訳 講読と討論① 『鈍感力』渡辺淳一 第十一章 第11回 日本語小説の中国語翻訳 講読と討論② 『鈍感力』渡辺淳一 第十二章 第12回 日本語小説の中国語翻訳 講読と討論③ 『鈍感力』渡辺淳一 第十五章 第13回 中国映画の日本語字幕① 小説との翻訳の違い 『北京バイオリン』前半 第14回 中国映画の日本語字幕② 小説との翻訳の違い 『北京バイオリン』後半 第15回 中国映画の日本語字幕③ 小説との翻訳の違い 『中国の小さなお針子』
評価方法・基準	授業への参加の積極性 40%、レポート 60%を目安として総合的に判断し評価する。
教 材 な ど	教材は随時配付する。
備 考	特になし

■ LE035・LC031・LL043

科 目 名	: 研究指導 1・2
担 当 者	: 研究指導教員
週 時 間 数	: 2
単 位 数	: 4
配 当 年 次	: 2 年
開 講 期 間	: 通年
授 業 目 標	: 春学期：修士論文または特定課題研究成果報告書の作成に向けて必要な文献の収集と精査、研究計画の立案等を行う。 秋学期：修士論文または特定課題研究成果報告書の完成に向けて草案の作成、問題点の整理と改善、最終稿の執筆を行う。
授業内容・方法	: 研究指導教員による個別指導。
授 業 計 画	: 春学期：授業の進め方は研究指導教員により異なるが、概ね以下の段階を経て進める。 第 1 回 基本文献のレビュー 第 2 回 基本文献のレビュー 第 3 回 基本文献のレビュー 第 4 回 研究テーマの設定 第 5 回 研究テーマの設定 第 6 回 研究テーマの設定 第 7 回 研究計画の作成 第 8 回 研究計画の作成 第 9 回 研究計画の作成 第 10 回 データの収集・分析 第 11 回 データの収集・分析 第 12 回 データの収集・分析 第 13 回 最新の文献の研究 第 14 回 最新の文献の研究 第 15 回 最新の文献の研究 秋学期：授業の進め方は研究指導教員により異なるが、概ね以下の段階を経て進める。 第 1 回 草稿の作成 第 2 回 草稿の作成 第 3 回 草稿の作成 第 4 回 問題点の整理と改善 第 5 回 問題点の整理と改善 第 6 回 問題点の整理と改善 第 7 回 草稿の修正 第 8 回 草稿の修正 第 9 回 草稿の修正 第 10 回 修士論文または特定課題研究成果報告書の完成・提出 第 11 回 修士論文または特定課題研究成果報告書の完成・提出 第 12 回 修士論文または特定課題研究成果報告書の完成・提出 第 13 回 口頭試問 第 14 回 口頭試問 第 15 回 口頭試問
評価方法・基準	: 修士論文または特定課題研究成果報告書の内容および口頭試問の結果により評価する。
教 材 な ど	: 必要に応じ研究指導教員が指示する。
備 考	: